

「特別インタビュー 井澤先生に聞く」

―井澤先生、長い間ご無沙汰しております。お元気でお過ごしでしたでしょうか。

ところで、我々清流会14回生の有志のメンバーが昨年8月にホームページを立ち上げ、インターネット同窓会が繰り広げられています。

そこで、ゴルフコンペの機会に、井澤先生に特別インタビューを実施して、同窓生にメッセージさせていただくこととしました。ご協力よろしくお願いします。

最初の質問ですが、先生は、いつ、どこでお生まれになったのでしょうか。また、今はどこにお住まいでしょうか。

<井澤>

私は、1923年7月11日（大正12年）に、加古郡稲美町下草谷に生まれました。
のどかな農村地帯で伸び伸びと育ちました。

大正12年と言えば、関東大震災が起こった年で、大変な年だったと思います。

当時の日本の国は、世界では発展途上の小国で、現在とは比べものにならないほど貧しい国であったと思います。

現在私は、加古川市加古川町溝之口に、次女が同居して鍼灸院を営んでおります。
現在83歳になりました。

―ところで、先生は80歳を過ぎてもなお、お元気そうですが、最近はどんな生活をお送りでしょうか。

<井澤>

毎日は、自然体と言いますか、朝晩は軽い体操や散歩に出かけたりしていますが、特に決まったスタイルはありません。

同窓会、ゴルフやその他の会合にもできるだけ参加するようにしています。
テレビは、スポーツ、劇、映画、囲碁などをよく見えています。

パソコンも少々できるようになり、清流会14回生のホームページも時々拝見させていただいております。

まあ、全体としてはその日暮らしといったところでしょうか。（笑）

―先生は、数学教師の道を歩まれましたが、選ばれた理由や背景を教えてくださいませんか。

<井澤>

きっかけは、加古川中学（現加古川東高校）2年生の頃だったと思います。代数のテストで学年最高点を取り、しかも私一人だけしか解けなかった問題を、当時の先生から、皆の前で披露されたことがありました。その時は、本当に嬉しかったことを今でも覚えています。

それからは、数学に特に力を入れるようになり、数学だけは誰にも負けませんでした。先生や同級生から認めてもらったことから、大きな励みになりました。

それがきっかけで数学教師の道に進むことになりました。

他の教科は、奮いませんでしたけどね。（笑）

—他人から認められることによって、それが自信になり、さらに向上していくことがよくありますし、人生の進路のきっかけになることがよくありますね。ところで、井澤先生にとって、数学とは？何とお答えいただけるでしょうか。

<井澤>

数学は、人生そのものです。私の半生は、喜び悲しみも全てが数学でした。数学に明け暮れた人生ですね。

今では、数学はすっかり忘れてしまいましたが、何か肩の荷がとれたような感じがします。

—長い教師人生で、色々なことがあったと思いますが、思い出として強く残っていることがあれば、お聞かせください。

<井澤>

中学卒業後、広島高等師範学校、広島文理科大学数学科に進み、昭和21年9月に卒業しました。終戦後間もない荒廃した世の中での船出でした。

神戸一中（現神戸高校）が最初の赴任地でした。初めの頃は全てに戸惑い、授業は我流で進めていました。

一度も教育実習を受けたことがなく、全くの我流で一生貫いてきましたが、懐かしく思う反面、恥ずかしいことだったなと思っています。

赴任後1年程経て学級担任としてクラスを受け持ちましたが、生徒一人一人と肌で接することができたことは、今でも忘れることができない感激でした。

—ところで、よく先生方は、「教師冥利に尽きる」という言葉が使われることがありますが、先生は、どんな場面で「教師冥利」をお感じになられたのでしょうか。

<井澤>

昔の生徒との出会いは、何でも気軽に話せそうで若返ります。

同窓会、特に教え子の同級生のゴルフコンペにもお誘いをしてもらい、まるで友達同士のよう
に無駄口をしゃべりながらプレーできることは何よりも楽しいことです。

これこそ、他の人が味わえない「教師冥利」と思っています。

一加古川東高校では、何年お勤めされたのですか。その間の一番の思い出はなんでしょう。

＜井澤＞

加古川東高校には26年6ヶ月間勤務しました。

中学卒業以来8年ぶりに母校へ教師として帰ってきましたが、懐かしい校舎、教えてもらっ
た先生方もかなりおられた中で、校長先生から、「新進気鋭の先生」を迎えたと紹介してい
ただいた時に、身震いを感じたのを今でも思い出します。

一話は少し堅くなりますが、先生は、戦前の教育を受けられ、敗戦によって価値観が大転換
した中で戦後教育に携わってこられました。

戦後60年、学校現場の崩壊、保護者の過剰な関心と介入、先生の権威の喪失、子供たち
の自由と権利意識からくる歪等様々な問題が生じてきています。

教育改革が叫ばれていますが、先生から見ると、教育のあり方についてどのようにお考えし
ようか。

＜井澤＞

私は、戦前、戦後の教育に携わってきましたが、高校の数学教師としての面が強くて、全
体的にはよい教師ではなかったように思います。

難しい問題が沢山あり、容易に解決できないかもしれませんが、希望を持って時代を担う
人達に解決して欲しいと思っています。

一話は変わりますが、先生はいつからどのようにゴルフに取り組まれたのでしょうか。

＜井澤＞

66歳の時に、同級生のゴルフ会「エニワン」（担任の井内先生のニックネーム）に参加さ
せて貰ったのが始まりです。

たまたま、いなみ野学園で学び始めたので、ゴルフクラブに所属し、毎月1回程度ですが、
現在も参加し続けています。

東校の先輩、後輩や教え子のゴルフコンペの案内を貰ったら喜んで参加させていただいて
います。

清流会のコンペには2回優勝しましたが、平成7年3月の取り切り戦では、当時の長谷
川末吉同窓会長寄贈の優勝カップをいただき、大切な宝物として部屋に飾っております。

一ちょっと聞きにくいのですが、先生には、有名なニックネームがありますが、先生はどのように感じておられるのでしょうか。また、命名者はご存知なののでしょうか。

<井澤>

命名は、高校4回生あたりかと思っています。

戦後の粗末な教科書で、 Σ (シグマ) の使い方がなかなか理解して貰えなくて、繰り返し繰り返し、口が酸っぱくなるほど説明したせいでしょう。

ニックネームについては、「動物の名や色々な名があるが、貴方は、数学の先生で数学に因んだ名だから、むしろ喜ぶべきではないか」と言われたことがあります。

私もそのように思うようにしています。

一最後になりますが、我々14回生は既に還暦を過ぎました。先生とは、約20歳離れています。先生の座右の銘がございましたらお教えください。我々が今後の人生を歩んでいくために、参考にさせていただければ嬉しく思います。

<井澤>

「誠心、誠意」、亡くなった父が言っていた言葉ですね。

古臭くて融通がきかないような感じがしていましたが、最近だんだんこの言葉が好きになってきました。

えらそんなことを皆さん方には言えませんが、毎日目標を持って生き生きと過ごしていたければ、嬉しく思います。

一ありがとうございました。井澤先生のインタビューは早速、ホームページに掲載させていただきます。きっと同窓生の多くからアクセスがあると確信しています。

先生もいつまでもお元気でお過ごしください。

(井澤先生は、本当に質実、誠実の方でした。今後の生き方として参考にさせていただきたいと思いました。)

(終)